

七窯社が生み出す

やきもののアクセサリー

タイルの役割である「装飾」をテーマに、人を彩るタイルを生み出す七窯社。

地元の若手陶芸作家を商品開発部に採用し、ブローチやピアス、イヤリングなどのアクセサリーを制作しています。

昨年には、マスク用チャームといった

コロナ禍ならではの製品も開発しました。

低迷するタイル市場の打破を
建材からアクセサリーへ転換

全国有数のタイルの生産地として知られる多治見市。中でも、1949年に創業した七窯社は、タイルの新しい楽しみ方を提案するブランドとして、日々タイルの価値を高める活動をしています。

1984年には鈴研・陶業を設立し、役物と呼ばれる建物のコーナー部分に使用する曲がったタイルをはじめ、特殊なタイル生地での製造も行ってきました。

現在の代表、鈴木耕二さんがこの業界に身を置いたのは21歳の時です。タイル市場は縮小傾向にあり、このまま事業を継続していったらよいか

懸念を抱かざるを得ない状況にありました。景気の低迷も重なり、「何かしなければならぬ」という思いは強くなっていました。

「私にはタイルしかない、一生かけてやりきりたい」。そんな決意のもと、建材以外の活用方法を模索し、触れて遊べるパズルや気軽に生活に取り入れられる雑貨をタイルで表現しようと試みます。「一般の方にタイルの魅力を知ってもらうことが大切だと感じていました。ところが、興味を持つてはもらえても、中々売れない時期が続きましたね」と鈴木さんは当時を振り返ります。

新商品の開発を続けていた2014年、インターンのアイデアによってようやくアクセサリーに可能性を



「かまもの」の商品、手描きの小さなタイルシリーズの「ばら」。ポップなデザインで、呉須(コバルト)からとれる藍色の顔料)を用いて生地に直接絵を描き入れる伝統技法「染付」を身近に楽しめず。本体部分のタイルは薄く、1g以下という軽さを実現しました



information | 七窯社

〈住所〉多治見市高田町8-106

〈TEL〉0572-22-0388

〈営〉10:00~20:00(土曜は15:00まで)
※ワークショップは要予約

〈休〉日曜、祝日

オンラインでも購入できる! 詳しくはこちら



「かまもの」の商品「ひらたい桜」のデザイン画と、型押し成形をしているところ。ちょうどよい量の粘土を使い、しわができないように石膏の型に押し込みとり出すことで、桜の形が完成します

見いだします。「何これ?可愛い」「タイルでこんな商品ができるんだ。すごい!」。反響に手応えを感じ、本格的な商品化に向けて、金型

や部品、重量といった問題を解決すべく、試行錯誤を重ねました。それまでは精度の維持や、無駄のない生産に囚われていましたが、改めてタイルの魅力に気づき、世界が広がる感触を掴んだといいます。

「建物を装飾すること、人を彩ることは同じ。タイルの魅力はきれいなところ。タイルの彩りで、みなさんに喜んでもらえる商品を作りたいと思うようになりました」

仕事の理念を見つめ直すに当たり、以前は顧客第一で、家族や社員、友人、自分を犠牲にしてきたシーンが多かったと思いついた鈴木さん。身の回りの誰も蔑ろにしないようにと、志を新たにしました。地域への恩返しも目標の一つで、ふるさと納税の返礼品への協力はその一環です。

手づくりだからこそ

繊細さや温もり、素朴さが魅力

ピアスやイヤリングは直径1cm、薄さ2mmほど。通常のタイルのようにスプレーガンを使用して釉薬を施すと、風圧で飛ばされてしまうため、職人が一つずつ筆で絵付けをしています。だからこそ醸し出される繊細



有限会社鈴研・陶業 代表取締役 鈴木耕二さん

さや温もり、素朴な風合いも、タイルアクセサリーの魅力でしょう。

商品は「まれもの」「かまもの」「てのもの」と、大きく3つのカテゴリに分かれています。「まれもの」と「てのもの」ではデザイナーが異なり、「まれもの」は陶芸作家、ののむらみなみさんが、「てのもの」は駒井香文さんが手掛けています。

「多治見には高い技術とセンスを持つた人がいるのに、それを生かせる場は多くありません。作家の後押しをしないと気持ちから、デザイナーとして働いてもらっていません」作家に依頼する際に大切にしているのは、作家自身が欲しいと思えるかどうか。「売れるもの」という商業目線ではなく、感性を第一にして制作にあたってもらっています。

昨年にはコロナ禍の中で自分たちに何ができるか、どうしたら役に立てるかを考え、マスク用チャームを開発。イヤリングはマスクの着脱時に外れやすかったけれど、これなら大丈夫。「マスクを間違えなくて良い」と、喜びの声が集まっています。商品開発はもちろん、情報の発信にも力を入れ、企業展などにも積極的に出展。バイヤーから注目を浴び、

女性デザイナー2人にインタビュー



「てのもの」担当 陶芸作家 駒井香文さん

Q.仕事の楽しさを感じる瞬間は?

インスタグラムなどで私のアクセサリーを付けている写真を見た時、実際に使用してくれているんだと実感が湧いてうれしかったです。

Q.制作時のエピソードを教えてください

頭で描いた形や色が思ったとおりに行かない時は、一旦離れて違うデザインを考えます。違う作業をしていると、関心があるからです。世界中にはたくさん種類や様式のタイルがあるので、もっと勉強して参考にしたいです。

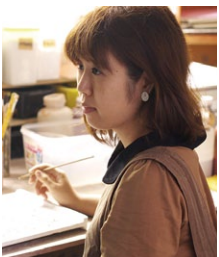


Q.仕事の楽しさを感じる瞬間は?

釉薬のテストで素敵な色が出ると、わくわくしますね。日常の中でも、「かわいい!」「素敵だな」って心が動いた時に、制作意欲が湧いてきます。

Q.制作時のエピソードを教えてください

同じ釉薬でも、分厚くかけると奥深さが増し、全然違う色になります。質感もツヤや透明感を出すか、土っぽい雰囲気を生かすかで印象が変わります。そうしたやきものならではの魅力を発見しながら、伝えていきたいです。



「まれもの」担当 陶芸作家 ののむらみなみさん

東海地方だけでなく、全国規模で徐々に取扱店舗を増やしてきました。その背景には「真珠や珊瑚など高価なジュエリーではなく、もっと手軽に楽しんでもらえる、メイドインジャパンのアクセサリーを生み出したい」という願いがあります。七窯社では4月12日を「タイルの日」として提唱しています。一定の呼称がなく、化粧煉瓦、貼付煉瓦、装飾煉瓦、貼瓦、敷瓦などさまざまな名称を用いられてきたタイル。4月12日は、1922年全国タイル業者大会で名称統一が可決された日にちなんでいます。

来年は折しもタイルの名称統一から100周年。「タイルの仕事に携わるみなさんがタイルに感謝し、ファンを増やす日としていきたい。何か記念イベントができれば」と鈴木さんは目を輝かせます。人気マンガ「キン肉マン」に登場するキャラクター「タイルマン」の周知、陶彩という漢字を広めていくことも今後の目標。「既存のタイルづくりと並行しつつ、新たな可能性を信じ、面白く楽しい提案を続けていけるブランドを目指したいです」と、これからの展望を話してくれました。空間から人を装飾するタイルへ、新たな価値を見いだした七窯社。あふれるアイデアで、これからも私たちの生活を美しく彩ってくれることでしょう。